関東平野における
中世常滑窯製品の出土分布

赤　羽　一　郎

はじめに

平安時代末期（12世紀初頭）に始まる中世常滑窯は、地形・地質（築窯と成形）、燃料（焼成）という陶器生産に必須の条件にめぐまれて、わが国有数の中世窯としての発展をみせている。それは知多半島のほぼ全域に分布する膨大な数の古窯跡によってもみてとることができる。しかし、中世常滑窯の発展を考えていく上で看過することのできないいまひとつの要因として、天然の埠頭と呼ばれているほどに、穏かな伊勢湾・三河湾に囲まれて、海運を充分に活用することができたことをあげなければならない。近年、中世常滑窯製品が、わが国の広汎な範囲の遺跡で発見されているが、これらの大半が海上輸送手段によって運ばれたものとみて差支えないであろう。このように陶器生産にかかるめぐまれた条件と海上輸送手段の活用とは、多大な需要に応ずることのできた、製品の質の高さと供給能力を中世常滑窯に保障してきたのである。

さて、中世陶器をめぐる調査、研究において、生産遺跡である窯跡にくらべて消費地 ― というよりも、生産地と消費地とを結ぶ流通機構あるいは手段 ― の調査、研究が遅れをとっている点は否めない。本稿で関東平野を例にして中世常滑窯製品の出土分布について若干の検討を加えるのも、生産地に携わってきた者の消費地研究の遅れを痛感しているからであり、太平洋沿岸の海上輸送によって関東平野に運搬された中世常滑窯製品が、どのような人々のもとに、どのような手段によってもたらされたかを検証してみたいからである。このような消費地研究のフィールドとして関東平野を選択した理由は、なによりも①中世常滑窯製品の発見例が東海地方についで多いことである。このことは、ひとえに関東平野における発掘担当者や研究者の努力の賜物にほかならない。②中世常滑窯製品出土遺跡（以下、出土遺跡という）の性格が単一でなく、また製品の出土態様も、経筒外容器・随伴物容器（経塚）、蔵骨器（墓跡）、調理具・貯蔵容器（集落跡・城館跡）と多様であること。③相模川・多摩川・荒川（入間川）・利根川などの複数の水系がみられ、出土遺跡の分布もこれらの水系に対応していると考えられること、である。

1.　中世常滑窯製品の年代と出土態様

今日までに筆者の知る限りにおいて、関東平野での出土遺跡は133件を数える。この件数は、全国の出土遺跡の約30％にあたり、鎌倉を中心とする関東平野が常滑窯製品の一大消費地であったことを示している。これらの遺跡は関東平野に均等に分布しているのではなく、その大半が河川に沿って群を形成している（図1）。このこと自体が意味するものについては次節以降に譲るとして、まず常滑窯製品が発見された遺跡の性格と製品の年代との関係をあきらかにしておきたい。(注1) この関係を示す表1の作成にあたっては、一遺跡が、たとえば経塚と墓跡双方によって構成されている場合、また一遺跡の製品が複数の段階にわたっている場合は、それぞれの欄に数字を加えているので、合計は出土遺跡総数（133）を超える。これは表2以下同様である。

さて、表1であきらかなように、経塚にみられる製品は第Ⅰ～Ⅱ段階に属するものによって占められている。また墓跡については、第Ⅱ段階に始まり第Ⅲ～Ⅳ段階のものが最も多くみられ、第Ⅴ段階のものも若干ある。城館跡出土の製品では、第Ⅲ～Ⅴ段階、さらには17世紀初頭まで下

● 第Ⅰ・Ⅱ段階（A.D.1,100～1,250）

■ 第Ⅲ・Ⅳ段階（A.D.1,250～1,450）

▲ 第Ⅴ段階以降（A.D.1,450～17C初頭）

× 不明

（番号は、付表瓜を示す）

図1　関東の常滑窯製品出土分布図

がると考えられるものがみられる。一方、集落跡については、第Ⅲ段階の例がみられるものの、遺跡そのものの数が少ない。これは、集落跡と決めることに、発掘調査の範囲が狭いこと、あるいは伴出遺物に集落跡を示唆する要素が乏しいことなどにより筆者が躊躇し、強いて集落跡とせず不明分に含めたためである。したがって、性格不明の遺跡の少なからぬ部分が、この集落跡によって占められるのではないかと思う。

なお、同表下段に出土遺跡の性格と製品の器種の関係についてもあらわしてみた。特に顕著な点は、経塚からは古い形態の壷と三筋壷が、また墓跡からは大甕・(中)甕・小甕といった甕形態の容器と、口縁端部が外側に丸く屈曲した小型の壷が多く出土していることである。とくに、小甕と小型壷の墓跡からの出土頻度は高く、蔵骨器専用の容器であったことをうかがわせる。

段階＼性格	経塚	墓跡	城館跡	集落跡	不明	計
Ⅰ	4				2	6
Ⅱ	9	6			9	24
Ⅲ		27	2	2	33	64
Ⅳ		22	3		19	44
Ⅴ	(1)	6	2		8	16 (1)
～17C		1	2		3	6
不明		4			8	12
計	13 (1)	66	9	2	82	172 (1)
器種＼						
片口鉢	2	6	3			
壷	7		4※			
三筋壷	7	3				
小壷		29				
大甕		5				
甕		5	4	2		
小甕		15				

※ 城館跡出土の壷4例は、左欄の経塚出土の壷とは異なり、半地下式大窯によって焼成されたと考えられるもので、いずれも16世紀中葉以降17世紀初頭のものである。

表1 出土遺跡（性格別）における段階別・器種別の頻度

このように、関東平野の出土遺跡の性格によって製品の年代や器種に変化が認められるのであるが、この現象は、全国各地の出土遺跡例を対象としても容認しうるものである。

2. 水系と出土分布

中世常滑窯製品の消費地調査のフィールドとして関東平野を選択した理由のひとつに、複数の水系の存在をあげたが、出土遺跡あるいはそこにみられる製品について、国別・水系別に分けて表2であらわした。以下、各地域について解説していきたい。

(1) 相模国

中世の首都鎌倉は単独に区分し、相模川水系と西部を流れる酒匂川水系は一括して取扱った。

a.鎌倉　治承四年（1180）に鎌倉にはいった源頼朝は、居館・役所・寺社を次々に建設し、鎌倉は中世の首都としての威容をみせていく。この鎌倉における出土遺跡は34箇所を数えるが、それらの分布域は御府内と呼ばれる中心部とその外縁の山之内、極楽寺の地域に限られている。出土遺跡の性格は、不明分を除く全てが墓跡であるが、蔵骨器と考えられる三筋壷・小壷・小甕（図2）のほかに、調理具としての片口鉢、貯蔵容器としての大甕・甕も多く、性格不明の遺跡には居館や寺社の日常生活にかかる遺構も少なくないと推測する。

さて、鎌倉出土の製品の中で最も年代の遡る資料のひとつとして図2の三筋壷をあげることができる。この三筋壷は、沈線が単線で細く頸部と肩を画する線が消えていることから、第Ⅱ段階の後半（A.D 1200～1250）に比定される。これにつぐ第Ⅲ～Ⅳ段階の製品が鎌倉では最も多くみうけられる。したがって、頼朝の鎌倉建設に即応して常滑窯製品がもちこまれているとはいいがたく、大概半世紀の時間差が想定されるのである。鎌倉における外来物資の到来地としては、材木座海岸東端の和賀江島が知られているが、この和賀江島は、貞永三年（1232）に勧進聖往阿弥

陀仏によって築港工事が始められており、鎌倉幕府もこれに助勢している。中世常滑窯製品が海上輸送(注2)によらなくては長距離運搬が不可能であったことを想起すると、この和賀江島の築港工事が、鎌倉への移入のひとつの端緒となったことが考えられるのである。

鎌倉における常滑窯製品は、第Ⅴ段階の前半、すなわち15世紀末葉までのものがみうけられる。しかし、その大半は小甕を主体にした蔵骨器であり、康正元年（1455）に鎌倉公方足利成氏が下総国古河に遁走した後の鎌倉では、常滑窯製品の需要が急激に減少したことを物語っている。

国（水系）／段階	相模国		武蔵国				安房国	上総国	下総国	常陸国	計
	（鎌倉）	相模川水系等	多摩川水系	荒川水系	上野国（利根川水系）	下野国（思川水系）					
Ⅰ			1	2						3	6
Ⅱ	3	4	8	3					5		23
Ⅲ	19	3	6	11	5	4	1	1	6		56
Ⅳ	15	2	5	10	2	2		3	1		40
Ⅴ	6	1	2	2				3			14
～17C			1	3			1		3		8
不明	3	4	1	4							12
計	46	14	24	35	7	6	2	7	15	3	159
性格											
経塚		2	5	3			1		1	2	14
墓跡	12	5	7	14	4	1		3	5		51
城館跡			1	3		1			1		6
集落跡				1		1					2
不明	33	6	10	8	2	1	1	3	7	1	62
計	35	13	23	29	6	4	2	6	14	3	135
器種											
片口鉢	11	2	5	3	1	1		1	3		
壷		3	6(1)	3(1)			(1)		1(3)		
三筋壷	2	1	4	2					2	3	
小壷	11	3	3	10	2	2		1	5		
大甕	4		1	4				3			
甕	19	3	6	7	4	2	1	2	2		
小甕	6	2	2	4				1			

（）は外数で、表1の※注参照

表2　国（水系）別の年代別・遺跡性格別・器種別の様相

b.相模川水系等　丹沢山塊に源を発する相模川は、典型的な河岸段丘と幅広い沖積砂丘平野を形成して相模湾に流れこんでいる。この相模川流域には、土着の武力集団が律令制から脱落した農民層を組織化して開拓した土地を基盤にした荘園が多くみられる。丹沢の前山である大山付近に散見する経塚は、このような荘園の在地領主が造営したものと考えられる。これらの経塚からは、第Ⅱ段階前半（A.D 1150～1200）の常滑窯製品が発見されている。

一方、相模川中流域に点在する墓跡からは、第Ⅱ～Ⅴ段階の製品が出土している。単一墓跡当りの蔵骨器の数量は多くないものの、墓跡に伴う石碑には秩父原産の青石（緑泥片岩）が多く用いられており、蔵骨器を含めてそのような造墓資材を調達することができたのは、この地域に勢力をもっていた国人層やその被人ではないかと思われる。

なお、相模国西部の酒匂川中流に位置する山北古墓（足柄上郡山北町尺里）は、第Ⅱ～Ⅳ段階の常滑窯製品のほか、瀬戸窯、渥美窯の製品をも含んでおり、造営期間の長いことや遺物の豊富な点で特筆される墓跡であり、あるいは、酒匂川流域に根強い勢力を維持していた河村氏あるいは松田氏に関わるものかもしれない。

(2)　武蔵国

上：三筋壷（二階堂）
中：刻文壷（大　町）
下：小　甕（極楽寺）

図２　鎌倉出土の常滑窯製品

今日の東京都と埼玉県、それに神奈川県の東半部が含まれる武蔵国は、おおよそ南部の多摩川水系、中央部の荒川（入間川）水系、および北端の利根川水系に分けることができる。

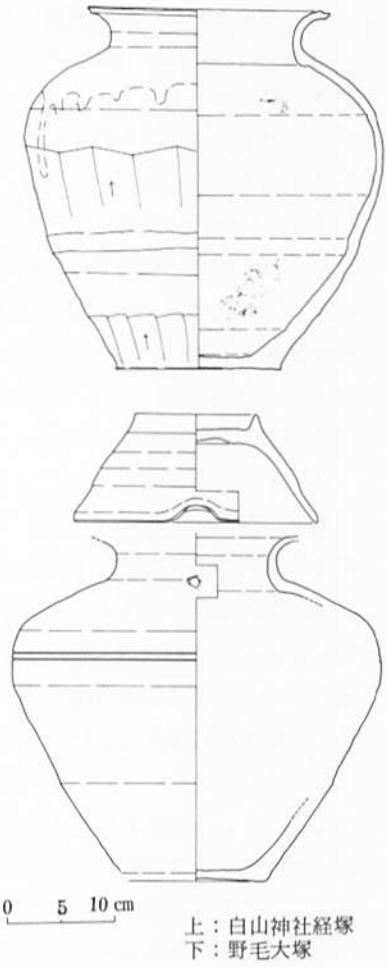
a.多摩川水系　甲斐国と境を接する奥多摩から流れでる多摩川は、途中秋川と浅川を加え、多摩丘陵と武蔵野台地を分けて東京湾に到達する。この多摩川の流域には出土遺跡が多く、20箇所あまりが確認されている。なお、通常多摩丘陵は、多摩川と鶴見川にはさまれた高地を指すが、本稿では鶴見川右岸（南側）の出土遺跡をも、この多摩川水系に含めることとした。

この多摩川水系で注目される点は、第Ⅰ～Ⅱ段階の製品を伴う出土遺跡が多く、かつそれらの多くが経塚であることである。この水系を代表する経塚のひとつに白山神社経塚（八王子市中山）があるが、仁平四年（1154）銘のある紙本血書経を納めた経筒などとともに、常滑壷（図３－上）、渥美窯壷・経筒外容器(注3)が発見されている。また下流域では、野毛大塚古墳（世田谷区上野毛）の墳丘を再利用した経塚（図３－下）、またその対岸、つまり多摩川右岸の台地上にも経塚や墓跡があり、古い段階の常滑窯製品を伴っている。なお、国宝渥美秋草文壷（慶応義塾大学蔵）も、その台地上の（現）川崎市幸区南加瀬から発見されている。

ところで、『延喜式』には左馬寮管掌の官牧として、石川・由比・小川・立野の四牧があげられており、また延喜式以後小野牧も勅旨牧に指定されている。これらの牧の詳しい所在地は判っていないが、いずれも多摩川流域にあったことは承認されている。さらに、多摩丘陵には、南多摩窯跡群があり、８世紀前半から11世紀初頭にかけて武蔵・相模両国分寺の瓦や須恵器を生産している。この南多摩窯跡群は、関東平野の他の須恵器生産が衰退する10世紀以降にもさかんに生産を継続しており、その要因として燃料の入手が順調であったこと、消費地の須恵器需要がひきつづき活発であったことが指摘されている。このような多摩川水系には、牧を根拠にした武蔵七党(注4)と呼ばれる武士団や、南下した秩父氏の分脈が蟠踞し、生産力の高揚を背景に形成された荘園の中で、一層勢力を蓄えていくのである。落川遺跡（日野市落川）にみられる高度な消費生活の様相は、このような有力武士団の形成を物語っている。(注5)多摩川水系にみられる比較的古い時期の経塚や墓跡の存在によっても、このことが推測されるのである。

b.荒川（入間川）水系　いまより遡ること約千年、つまり平安時代中頃の荒川は、今日の荒川とは流路を異にし、今日の綾瀬川と元荒川を交互にわたる形で流れていた。(注6) 一方、現在の隅田川の上流である新河岸川筋を荒川に並行して入間川が流れていたと思われる。現在では、川越市東部で荒川に合流しているが、この入間川、越辺川、高麗川、さらには滑川、市川、都幾川をここでは、荒川（入間川）水系としておく。この水系の特徴は、埼玉県南西部の標高50～100 *m*の台地の間を東北方に流れ、台地縁辺で直角に方向を東南にかえていることである。出土遺跡は、河川の段丘上、あるいは台地の縁辺（東武東上線にほぼ沿っている）に点在している。この水系にも、秩父氏の分脈が進出し、畠山氏や河越氏といった有力武士団がおこってくるのである。もちろんこのような武士団の形成は数多くの闘争を経て形成されるのであり、この水系の中心地である入間川流域は、居館の造営にふさわしく、また交通の要衝でもあったため、幾多の戦いの場となっている。

この荒川（入間川）水系にみられる出土遺跡は約20箇所を数え、その時代相も上記の多摩川水系に似ているが、第Ⅰ～Ⅱ段階の製品を伴う経塚では多摩川水系が多く、逆に第Ⅲ～Ⅳ段階の製品を伴う墓跡はこの荒川（入間川）水系が多い。ここに両水系間の開発速度の若干の差を認めるのである。ちなみに、鎌倉幕府は、承元元年（1207）に関東平野の荒野の開拓を命令しているが、(注7) その開発の対象は、おもに武蔵国西部の山沿い、すなわちこの荒川（入間川）水系であった。この命令の目的は得宗（北条氏嫡系家）支配地の生産力を高めることにあったが、開発に関与した武士団の足跡が、墓跡にうかがわれるのである。



上：白山神社経塚
下：野毛大塚

図3　多摩川水系の常滑窯製品

さて、この荒川（入間川）水系にみられる出土遺跡で古い段階のものが、東京都北区赤羽台、同板橋区志村、埼玉県朝霞市宮戸など下流域の右岸台地上に分布している。また、市川と都幾川にはさまれた舌状台地上には、利仁神社（東松山市下野本）があり、その境内に建久七年（1196）銘の経筒を伴う経塚がある。この経筒は典型的な東国形式で、太目の筒身に陽鋳で、『勧進聖人　睿義大徳　壇越　應順大徳　女施主橘氏　建久七年大歳丙辰三月　初日如法経御筒奉鋳之状如件』と記されている。さらに共伴の松喰鶴鏡の鏡表には、『遠州山囲□、木原郷本住人今武州　吉見郡大串御住人藤原氏　為滅罪生善往生極楽証大菩提　所奉加如件』と墨書されている。これらの資料とともに常滑壷（図4－上）が出土しており、常滑窯製品の編年に有効な資料となっている。(注8)

一方、墓跡の資料としては、円照寺裏中世墓跡（入間市元加治）のものがある。この墓跡は、入間川河岸段丘の第一段丘面に位置しており、常滑小壷2、渥美壷および在地産の須恵器系陶器が出土している。この常滑小壷のうち一点（図4－下）は、建武元年（1334）銘の板碑の直

下から発見されている。墓跡における板碑は移動している場合が多く、共伴遺物の年代推定にあたって信をおくに足らないと考えられているが、この例の板碑と蔵骨器である常滑小壷とは、当初の形状を保っているという。この円照寺には、元弘三年（1333）に北条高時と行動を共にして敗死した加治左衛門入道家貞の追善供養のための板碑も遺されており、この寺は在地の有力者加治氏の菩提寺と考えられている。(注9) この墓跡もこの加治氏に関わるものと考えられる。(注10)

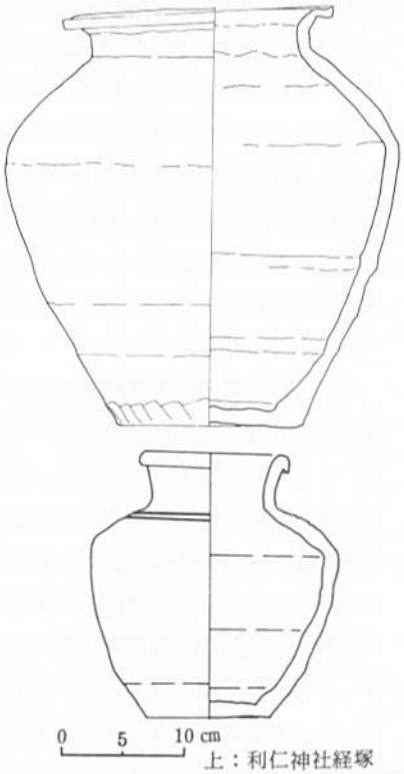
以上、武蔵国の多摩川と荒川（入間川）の水系に沿って出土分布をみてきたが、関東平野の他水系にくらべて、長期間にわたる分布密度の濃さは、高価であったであろう陶器の消費能力を保障する生産力の高さと、両水系の水運の便利さを示しているといえよう。このことには常滑窯大甕が鎌倉と上総といった沿海部を除いてはこの両水系だけにみられることからもうかがわれよう。なお、武蔵国については、利根川中流域の上野国境付近に10箇所ほど出土遺跡がみられるが、次の利根川水系で触れておく。

(3) 上野・下野国

現在の利根川の源流域となっている群馬・栃木両県を一括して取扱うが、上野国と北武蔵の一部を含む利根川水系と、下野国西部を南下している思川水系とに分けることができる。

a.利根川水系　坂東太郎、つまり関東随一の大河利根川は、かつては、埼玉県熊谷市の東から蛇行を繰返して東京湾へ流れこんでいた。また、今日の利根川の支流である渡良瀬川は思川と合流して今日の江戸川の流路をたどって、やはり東京湾に達している。一方、鬼怒川と小貝川は合流して霞ケ浦に流入していたのである。このように、かつては、多摩川、荒川（入間川）、利根川、さらに渡良瀬川・思川までが東京湾に大量の水を吐き出しており、このため東京湾沿岸さらには各水系の水害はおびただしく、その解決策として、近世初頭に利根川の東遷がおこなわれたのである。(注11)

さて、吾妻の山々を水源とする利根川は、関東平野への出口である前橋付近で大規模な扇状地を形成し、東へ流れている。この前橋扇状地と、武蔵国北端の利根川右岸に並列する自然堤防の微高地は、比較的古くから開発がすすんでおり、有力武士の根拠地となっていた。このような状況を反映して、この利根川水系は多摩川・荒川（入間川）両水系についで出土遺跡が多い。それらの出土遺跡の性格としては墓跡が多く、出土する常滑窯製品も第Ⅲ～Ⅳ段階に集中している。この墓跡の一例として長楽寺遺跡をあげることができる。この長楽寺（群馬県新田郡尾島田世良田）は新田義季が栄朝を招いて承久三年（1221）に建立した名刹であり、上野国に勢力を保持していた新田氏とは不可分の関係にある。この長楽寺にかゝる墓跡からは、常滑小壷、瀬戸窯の四耳壷・瓶子とともに在地産と思われる須恵器系陶器も多く発見されており、その蔵骨器の多様なことは、この地域にあって新田氏が陶器の流通さらには在地生産に



上：利仁神社経塚
下：円照寺裏中世墓跡

図4　荒川（入間川）水系の常滑窯製品

積極的に関与したであろうことを暗示している。

b.思川水系　下野国には渡良瀬川の支流、思川とその支流、さらには小貝川や那珂川の支流が北から南へほぼ並行して流れている。それらの支流が台地を刻み、多くの谷戸田が営まれていたと思われる。そのような農業生産力を背景にして、思川水系には宇都宮氏あるいは小山氏といった有力者が活躍していた。この水系における出土遺跡は、今日のところ4例を数えるのみであるが、将来の調査によって、下野武士の活躍を反映した少なからぬ出土遺跡の発見が期待される。

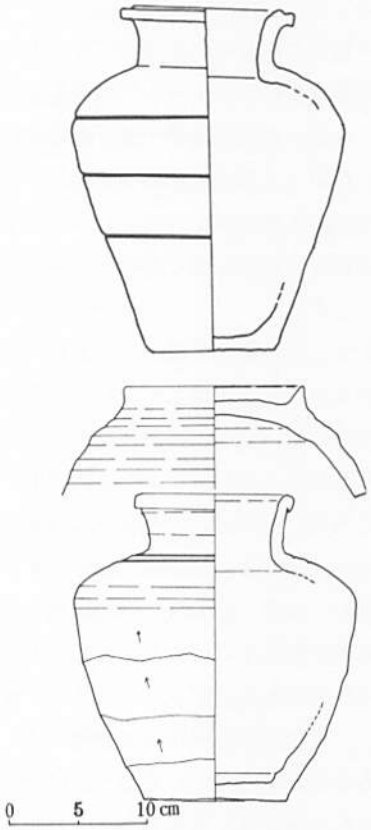
(4)　房総三国

現在の千葉県を構成する下総・上総・安房は、それぞれに地理・気候が異なるが、中世の農業基盤となった台地縁辺や扇状地は、下総では現在の利根川右岸、九十九里浜および現在の千葉市周辺が、また上総では養老川・小櫃川流域にみられ、これらの地域は寺社を中心とする寄進系荘園によって占められている。この房総三国の中で、比較的古い段階の常滑窯製品を伴う出土遺跡は、香取郡と千葉市周辺にみられる。前者は水運と武力の守護神として有名な香取神社の勢力圏に含まれており、また後者は周知のとおり千葉氏の本拠地である。このうち前者にある熊野神社境内経塚（八日市場市宮本）出土の三筋壷（図5－上）は、単線であるものの明瞭な沈線が施され、口縁が強く伸びており、第Ⅱ段階中葉のものと考えられる。このように熊野神社の境内に営まれ、常滑窯製品を伴う経塚は全国でも数例あり、熊野信仰と経塚造営とが深く結びついていたことが想定される。また、墓跡例としては現江戸川と利根川に挟まれた台地上に営まれた鎌田古墓（野田市吉春）があげられよう。この墓跡は、元応二年（1320）銘の板碑とともに常滑小壷（図5－下）、瀬戸窯瓶子が出土している。この常滑小壷は、上記の武蔵国円照寺裏中世墓跡のものと酷似しており、ともに14世紀前半代（第Ⅲ段階後半）の小壷の形状を示している。

上総国では、上総国分寺のある台地など、養老川流域に若干の出土遺跡がみられる。この養老川流域は、平広常など千葉氏につらなる一族の本拠地である。

(5)　常陸国

霞ケ浦に流れこむ常陸国内の河川流域にも3箇所の出土遺跡が知られているが、いずれも第Ⅰ段階の三筋壷を伴っており、経塚と考えられる。このうち東城寺遺跡（新治郡新治村東城寺）は、筑波山塊の南端に位置する幽玄の地にあり、複数の経塚が集中している。常滑三筋壷を伴う経塚には、『保安三年大歳壬寅八月十八日甲辰　如法経書写供養願(主)　聖人僧明覚大壇越平朝臣致幹　為□法界衆生平等利益所　遂果如右敬白』と刻まれた経筒もみられる。平致幹（幹）は、常陸大掾平良望（国香）の末裔にあたる人物である。致幹は多気権守とも呼ばれ、東城寺遺跡の東方5㎞の筑波山



上：熊野神社境内経塚
下：鎌田古墓の小壷と片口鉢

図5　下総国の常滑窯製品

西麓に本拠をかまえている。

この東城寺遺跡を含めた常陸国の経塚は、武蔵－下総－常陸－陸奥と続く陸路沿いにあり、経塚造営にかかる勧進僧の教線が東北地方へ伸びていく過程を示しているように思うのである。

3. 中世陶器流通の問題点

いままで、常滑窯製品出土遺跡に限ってその分布の様相をみてきた。そこでは、平安時代中期以降の開発行為によって高められた農業生産力を背景に、在地勢力の中に陶器に対する消費能力が培われ、常滑窯製品を始めとする中世陶器が、経塚容器や蔵骨器、さらには貯蔵容器などとして用いられていることを再確認してきた。また、それらの製品が内陸部に移送される上で、河川が大きな役割を果してきたことも想定された。とくに、鎌倉の外港である和賀江島を中継点とした相模川、多摩川、荒川（入間川）、利根川など東京湾にそそいでいる河川の水運が、常滑窯製品の流通に貢献していたことがわかるのである。

さて、関東平野では、常滑窯製品のみならず、同じ東海地方に属する瀬戸窯や渥美窯の製品、さらには中国輸入陶磁も多量にもたらされているのである。しかし、関東平野の鎌倉や上記の水系においてそれらの中世陶器(注15)、中国陶磁にかかる出土遺跡の頻度、あるいは遺跡における陶器の年代については必ずしも一様ではなく、差異が認められるのである。この差異のもつ意味について、ここでは常滑・瀬戸・渥美の各窯製品をとりあげて考えていきたい。

(1) 出土遺物の時間差と仮説

中世首都鎌倉の発掘調査がすすむにつれて、鎌倉時代初期（13世紀初頭～前半）には、渥美・瀬戸両窯製品の出土例が常滑窯製品のそれを上回っているという現象が明らかにされつつある。たとえば、蔵屋敷遺跡（鎌倉市御成町）の調査においては、遺構と遺物の検証から、年代が下るにしたがって渥美→瀬戸→常滑という順序で製品が増加していることが指摘されている(注16)。このような現象を考察する前提として、筆者は、①貯蔵容器としての渥美・常滑両窯製品の競合関係(注17)、②宗教的性格をおびた容器（たとえば蔵骨器）としての瀬戸・常滑両窯製品の競合関係を想定する。

まず、①の場合において、上記の発掘調査にみられる現象は、鎌倉の建設途上では常滑窯製品を押えて、大壷・壷といった渥美窯製品が採用されていることを示している。少なくとも平安時代末期においては、両窯製品とも経塚容器として関東平野から発見されているにもかかわらず、このような差異が生じているのである。この要因をさぐるために、筆者は、次のような仮説をたててみた。それは、ⓐ頼朝挙兵以来の重臣安達盛長が三河国守護であり、なおかつⓑ異母弟範頼が三河国司であったから、というものである。周知のように、安達藤九郎盛長は頼朝の乳母（比企尼）の娘婿として常に頼朝の傍におり、またその一族は北条氏と姻戚関係を結び、鎌倉幕府の中枢に位置していたのである。この盛長が三河国守護であったことは、吾妻鏡の正治元年(1199)十月廿四日の条に記されているが、実際は建久五年（1194）以前から守護であったと推定されている。また盛長が何時まで守護であったかは不明であるが、暦仁元年（1238）には足利氏が守護であることが判っているので(注18)、13世紀初頭までの可能性がある。一方、守護所の位置については、足利氏の場合は矢作宿であり、おそらく盛長も同様であったと思われる。近年矢作川河床で発見されている多量の中世陶器は、この矢作付近が当時の交通・物流の拠点であったことを物語っている(注19)。頼朝の重臣であり、三河国守護でもあった盛長が鎌倉建設にあたって、渥美窯製品の導入

に一定の役割を果していた、というのが仮説である。なお、範頼は元暦元年（1184）には、三河国司であったことが判明しており、上記の仮説を補強しうるものとしておく。

さて、②の場合については、鎌倉における墓の造営にかかる蔵骨器では、瀬戸窯の瓶子、四耳壷、あるいは広口壷が、常滑窯の小壷や小甕に先行して用いられていることを示している。つまり、両窯製品間にも鎌倉移入の時間差が認められるのである。この要因についても、ひとつの仮説をたててみたい。

平家没官領である山田郡御器所が瀬戸窯を指し、かつそれが北条氏によって掌握されていた可能性を指摘する見解があるが、常滑窯についても同様に北条氏一族が掌握していたことを示す文書が提示されている。(注20) それは園城寺文書の一部で次のように記されている。

『近江国山賀庄(注21)獻覚跡。伊勢国丹生庄□□守跡。尾張国枳頭子庄名越遠江入道跡。当寺造営之間所令寄附也。守先例可致沙汰之状如件。建武四年二月晦日　源朝臣（花押）』

この文書は、建武四年（1337）に、名越遠江入道が領有していた枳豆志庄が、北条氏が滅亡したのに伴って足利尊氏に没収され、期限つきで園城寺に寄進されたことを示している。したがって、この時期までは北条一族である名越氏が支配していたことになる。この枳豆志庄は、元来安楽寿院領であり、ついで八条女院領となったものであるが、承久の乱（1221）ののちは、鎌倉幕府に没収されている。したがって、常滑窯の生産力が最も高まった第Ⅲ段階の期間をとおして、名越氏によって常滑窯は掌握されていたと考えられるのである。なお、枳豆志庄の版図は明らかではないが、現常滑市の南半部をほぼ包括し、古窯の密集地域をも含んでいたものと考えられる。

いまここで仮説として取りあげるのは、瀬戸・常滑両窯が北条氏一族に掌握された時期の差異である。すなわち、平氏滅亡とともに平家没官領としていち早く鎌倉幕府の支配が及んだ瀬戸窯に対して、常滑窯では約四半世紀遅れて鎌倉幕府の支配が及び、この時間的な差異が、鎌倉移入における時間的な差となってあらわれたというわけである。

(2)　鎌倉と関東平野

鎌倉における常滑・瀬戸・渥美窯製品の出土の時間差について二つの仮説をたててみた。しかし、この仮説が関東平野一円の三窯製品の出土の様相をも説明しうるものとするには躊躇を感ずる。それは瀬戸・渥美両窯製品の出土分布に関する資料を常滑窯のそれほど持ちあわせていないこともあるが、上記の仮説以上に三窯製品の出土の様相を規定づけるものがあるのではないかとも考えるからである。今、知る限りの三窯製品の出土遺跡数を表3にあらわしてみた。実態からかけはなれた数字であることを承知の上で、若干の検討を加えたい。

a.渥美窯製品の出土遺跡については、武蔵国の多摩川・荒川（入間川）の両水系と、上・下総二国に多くみられる。この出土遺跡のうち経塚は多摩川水系2箇所、常陸国1箇所であるが、こ

国(水系)／産地	相模川水系等(除:鎌倉)	武蔵		上野国(利根川水系)	下野国(思川水系)	安房国	上総国	下総国	常陸国	計
		多摩川水系	荒川水系							
常滑	13	20	31	6	4	2	6	14	3	99
瀬戸	3	6	14	11	3	1	1	1	3	43
渥美	1	3	5	1	0	0	4	3	1	18

表3　関東平野における常滑・瀬戸・渥美各窯製品出土遺跡数

の全てが常滑窯製品を伴っている。これ以外の大半は墓跡であり、蔵骨器としても渥美窯製品は広い分布を示しており、鎌倉において貯蔵容器が多くみられる点とは趣きを異にする。ところで、関東平野には30箇所を超える「御厨」が知られているが、その多くが伊勢神宮の荘園であるという。(注22) この御厨の下司あるいは庄司として関東武士が荘園経済を把握していたのである。(注23) 渥美窯が伊勢神宮神官領の経営の一環として営まれていたことは周知のとおりであるが、その製品の供給先として関東の御厨の管理者である関東武士が想定されるのである。つまり、渥美窯製品の関東における販路は、御厨という形で保障されていたといえるのであり、常滑窯製品にくらべて強力な流通機構をそなえていたともいえるのである。このようにみてくると、鎌倉において常滑窯製品に先行して渥美窯製品がもたらされている点も、この潜在的ともいえる流通機構の反映とみた方が、上記の仮説よりも合理性がありそうである。

b.瀬戸窯製品の出土遺跡（大半が墓跡）では、武蔵国の両水系で多くみられる点は常滑・渥美両窯製品のそれと同様であり、両水系における消費能力の高さが示されている。一方、上野国利根川水系の頻度が極めて高く、逆に房総三国で少ないことは、瀬戸窯製品が必ずしも海上輸送に依存していたのではないことを暗示している。上野国に瀬戸窯製品が移入されるルートとしては、鎌倉から多摩丘陵・武蔵野台地を抜け入間川から台地縁辺を北上する路が考えられるが、小型品の多い瀬戸窯製品であれば、東山道を使って運搬されたことも考えられないことではない。

一方、相模川水系における瀬戸窯製品の出土遺跡は予想外に少ない。この現象を筆者は、鎌倉のもつ吸引力に要因を求めたい。つまり、中国陶磁に次ぐ高級陶器である瀬戸窯製品を入手できる程の相模国内の有力者は、鎌倉に集中していたのではないかと考えるからである。相模国では、宝治元年（1247）以降守護はおかれず、政所あるいは侍所が守護職権を分掌していたが、(注24) このような集中化の様相は、政治に限らず経済、文化の面でもいえるのではなかろうか。

ところで、中世瀬戸窯製品の大半が中国陶磁を本歌としていることは周知のとおりであるが、このような中国陶磁の器種の模倣が如何なる経緯によっておこなわれたかは必ずしも明らかではない。しかし上記の蔵屋敷遺跡の西100 *m*ほどに位置する千葉地遺跡（鎌倉市御成町）からは瀬戸窯の最も古い形態を示す灰釉四耳壷、瓶子とともに中国の白磁四耳壷（片）や青白磁梅瓶・水注が出土している。この遺跡は長期にわたる年代幅が想定されるが、渥美窯蓮弁文壷、瓶子、大壷を含み12世紀第4四半期に遡りうる。(注25) 鎌倉建設に相前後して到来した唐船がもたらしたこの遺跡でみられるような中国陶磁群は、高価故に模倣の衝動をかきたてたことと想像される。中国陶磁を本歌として生産された瀬戸窯製品は火葬の普及により蔵骨器として珍重され、関東平野においても鎌倉を中心に西部に広く分布しているが、その年代幅は13世紀初頭から14世紀中葉、すなわち鎌倉時代をほぼ含む期間である。(注26)

このように、瀬戸窯製品と常滑窯製品との鎌倉移入の時間差は、中国陶磁を模倣する上で瀬戸窯が機敏であったことに求められるのかもしれない。それだけ瀬戸の陶土が良質であったのであり、それ故に、中国陶磁も模倣することによりいち早く蔵骨器としての位置を獲得し、それまで古代陶器のもつ仏器的性格を部分的にしろ具備していた常滑窯製品から、その性格を奪取したのである。もっともこのような機敏さは、得宗被官中の有力者である安東氏の活躍に帰する部分もあったのかもしれない。(注27) そうであれば、上記の生産地に及んだ鎌倉幕府の支配の時間差も、あながち無視はできないことになるだろう。

まとめにかえて

本稿は鎌倉時代初期における常滑・瀬戸・渥美三窯の製品の鎌倉移入の時間差を中心にすえたのではないが、関東平野における常滑窯製品の出土分布を考察する場合、不可避な事柄であり紙数をさいた。このようにみてくると、関東平野への常滑窯製品の進出は、渥美窯製品のような御厨といった一種の流通機構もなく、また、中国陶磁を速かに模倣しうる陶土にもめぐまれない中で、徐々におこなわれたのである。しかし、鎌倉時代末期（14世紀前半）以降、大形陶器の成形、さらには量産化に対応することが可能であった常滑の陶土は、貯蔵容器においては渥美窯製品を凌駕し、蔵骨器においては低廉さと海上輸送の活用によって瀬戸窯製品を鎌倉も含めて関東平野から駆逐していくのである。

おわりにあたって、本稿のためにご協力いただいた浅野晴樹氏、石井栄治氏、玉林美男氏、常滑市立陶芸研究所、野田市立郷土博物館、八王子市郷土資料館、福田健司氏、武蔵野郷土館、山田友治氏、吉岡康暢氏に厚く御礼申しあげる。

なお、浅野晴樹氏（図4－下）、山田友治氏（図5－上）、吉岡康暢氏（図4－上）には実測図を使用させていただいた。重ねて謝意をあらわしたい。

注1. 拙稿『常滑―陶芸の歴史と技術』技報堂出版、1983で五段階に区分した編年表を提示した。
注2. 『吾妻鏡』貞永元年七月十二日条
注3. 蔵田蔵「経塚論4」（『MUSEUM』154所収）1964
注4. 服部敬史「多摩丘陵の古代窯址群」（『多摩のあゆみ』31所収）1983
注5. 福田健司「日野市落川遺跡」（前掲書(4)所収）
注6. 本間清利『利根川』埼玉新聞社、1978
注7. 『吾妻鏡』承元元年三月廿日条
注8. 蔵田蔵「経塚論3」（『MUSEUM』152所収）1963
注9. 浅野晴樹ほか『円照寺裏中世墓址』入間市教育委員会、1982
注10. 小野文雄『埼玉県の歴史』山川出版社、1971
注11. 前掲書（6）
注12. 山田友治ほか「県指定常滑三筋壷について」（『史館』3所収）1974
注13. この例のほか、神奈川県川崎市幸区北加瀬、山梨県中巨摩郡甲西町、長野県上伊那郡宮田村にある。
注14. 和田千吉「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」（『考古界』4－6所収）1904
注15. 『関東の中国陶磁』 群馬県立歴史博物館、1982
注16. 『掘り出された鎌倉』 神奈川新聞社・鎌倉考古学研究所、1981
注17. 服部美喜ほか『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会、1984
注18. 佐藤進一『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学出版会、1971
注19. 斉藤嘉彦「矢作川河床遺跡と遺物」（『岡崎市史研究』5所収）1983
注20. 藤沢良祐「長野県出土の古瀬戸について――特に蔵骨器を中心として――」（『信濃』31―11所収）1979
注21. 猪飼英一「高讃寺址出土の常滑陶と知多南部古窯址群」（『陶説』152所収）1965
注22. 竹内理三『荘園分布図・上巻』吉川弘文堂、1975
注23. 石井進『日本の歴史7・鎌倉幕府』中央公論社、1965
注24. 前掲書（18）
注25. 手塚直樹ほか『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団、1982
注26. 大三輪龍彦ほか『中世鎌倉の発掘』有隣堂、1983
注27. 前掲書（18）

（付 表）

関東における常滑窯製品出土地名表

No.	遺跡名	所在地	性格	器種（◎は図示したもの）	年代	引用文献等
1	茂木古墓	（上野）群馬県勢多郡大胡町	墓跡	壷	（Ⅲ）	浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(2)」（『埼玉県立歴史資料館研究紀要』5）1983
2	雨壷遺跡	〃 高崎市大八木町		甕	Ⅲ	『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壷遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団、1984
3	井野遺跡	〃 〃 井野町	墓跡	壷	（Ⅲ）	前掲書 1
4	浜町屋敷遺跡	〃 太田市浜町		甕	Ⅳ	『関東の中国陶磁』群馬県立歴史博物館、1982
5	東照宮内古墓群	〃 新田郡尾島町	墓跡	甕	Ⅲ	『長楽寺遺跡』尾島町教育委員会、1978
6	長楽寺遺跡	〃 〃 〃	〃	甕・片口鉢	Ⅲ～Ⅳ	〃
7	辻の内遺跡	（下野）栃木県宇都宮市西川田町	集落跡	甕	Ⅲ	『辻の内遺跡』栃木県文化振興事業団、1981
8	下古館址	〃下都賀郡国分寺町	館跡	甕・片口鉢	Ⅲ～Ⅳ	実見（小森哲也氏ほか教示）
9	愛宕神社境内遺跡	〃 小山市上石塚	墓跡	壷・片口小壷	Ⅲ～Ⅳ	田中作太郎「平安期の常滑陶について」（『陶説』7）1953 ほか
10	小山城址周辺遺跡	〃 〃		壷	（Ⅲ）	前掲書 1
11	門毛経塚	（常陸）茨城県西茨城郡岩瀬町	経塚	四筋壷ほか	Ⅰ	前掲書 4
12		〃 石岡市石岡町		三筋壷	Ⅰ	清水潤三「石岡市(常陸)発見の古代陶器について」（『考古学雑誌』48－2）1962
13	東城寺遺跡	〃 新治郡新治町	経塚	三筋壷	Ⅰ	和田千吉「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」（『考古界』4－6）1904
14	東谷中世墓址	（武蔵）埼玉県本庄市栗崎	墓跡	壷・小甕	Ⅲ～Ⅴ	浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(1)」（『埼玉県立歴史資料館研究紀要』3）1981
15	六反田遺跡	埼玉県大里郡岡部町	集落跡	甕	Ⅲ	『六反田』六反田遺跡調査会ほか、1981
16		〃 〃 妻沼町		甕	Ⅳ	前掲書 14
17		〃北埼玉郡南河原村		三筋壷	Ⅰ	〃
18	樋之上遺跡	〃 熊谷市三ケ尻		（片）		『資料館報 9』埼玉県立さきたま資料館、1978
19	念仏堂遺跡	〃 羽生市下岩瀬		甕		『念仏堂遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会、1973
20		〃 〃 須影	墓跡	小甕	Ⅳ	『考古学資料図録 1』国学院大学考古資料館、1978、ほか
21		〃 〃 砂山	〃	小甕	Ⅳ	前掲書 19
22	保寧寺遺跡	〃 北埼玉郡騎西町		（片）	（Ⅲ）	前掲書 1
23		〃 鴻巣市丸池		三耳壷	Ⅲ	前掲書 14
24	利仁神社経塚	〃 東松山市下野本	経塚	◎壷・片口鉢	Ⅱ	前掲書 9 ほか
25	慈光寺遺跡	〃 比企郡都幾川村	墓跡	壷	17C	前掲書 14
26	東福院遺跡	〃 〃 川島町	〃	壷	Ⅲ	浅野晴樹氏教示
27	三福寺遺跡	〃 坂戸市小山	〃	片口小壷	Ⅳ	前掲書 14
28		〃 〃 下広谷		大甕	Ⅴ	〃
29	堂山遺跡	〃 川越市名畑	墓跡	壷	Ⅲ	〃
30	河越館址	〃 〃 霞ケ関	館跡	壷・片口鉢	Ⅲ～Ⅳ	本沢慎輔氏教示
31	長宮遺跡	〃 上福岡市長宮		甕	Ⅲ	『埼玉県上福岡市北部遺跡群埋蔵文化財の調査(1)』上福岡市教育委員会、1979
32		〃 入間市野田	墓跡	壷	Ⅲ	浅野晴樹氏教示
33	円照寺裏中世墓址	〃 〃 元加治	〃	◎ 壷	Ⅲ	前掲書 14
34	薬師堂遺跡	〃 朝霞市宮戸	経塚	壷(多数)	Ⅰ	前掲書 9、ほか
35	新倉午王山遺跡	〃 和光市新倉	墓跡	大甕	Ⅳ	『新倉午王山遺跡』和光市午王山遺跡調査会、1981
36	東明寺遺跡	〃 〃 白子		壷	Ⅲ	前掲書 1

No.	遺跡名	所在地	性格	器種（◎は図示したもの）	年代	引用文献等
37	東明寺遺跡	埼玉県川口市安行		大甕・壷	Ⅳ～17C	前掲書 14
38		東京都青梅市塩船		三筋壷	Ⅱ	『続・江戸以前』東京新聞出版局、1982
39	下宿内山遺跡	〃 清瀬市下宿		大甕		『下宿内山（概報３）』下宿内山遺跡調査会、1979
40	下里本邑遺跡	〃東久留米市野火止		甕		『下里本邑』下里本邑遺跡調査会、1979
41		〃 小金井市貫井町		大甕	Ⅲ	実見（武蔵野郷土館）
42	前原地下式横穴	〃 〃 前原町	墓跡	甕	Ⅳ	『平代坂Ｂ』小金井市教育委員会、1973
43	御岳塚	〃 府中市西府町		甕・片口鉢	Ⅳ～Ⅴ	土井義夫「東京都府中市御岳塚の発掘調査」（『考古学ノート』５）1974
44	北浦遺跡	〃 調布市下布田町		甕		『調布市下布田遺跡』調布市教育委員会、1978
45	南広間地遺跡	〃 日野市下田		壷・甕・片口鉢	Ⅱ～Ⅳ	実見（スチュアート・ヘンリ氏ほか教示）
46	落川遺跡	〃 〃 落川		甕	Ⅲ	『落川遺跡調査概報Ⅱ』日野市落川遺跡調査会
47		〃 〃 百草		壷	Ⅲ	『東京都埋蔵文化財研修会・資料』1980
48	多摩ニュータウン513号遺跡	〃 稲城市大丸	経塚	三筋壷	Ⅱ	渡辺克彦氏ほか教示
49	白山神社経塚	〃 八王子市中山	〃	◎壷	Ⅰ	実見（八王子市立郷土資料館）
50	八王子城址	〃 〃元八王子町	城館址	壷・甕	Ⅴ～17C	〃
51		〃 板橋市志村	経塚・墓跡	三筋壷・壷など多数	Ⅱ	和田千吉「経塚及板碑関係遺物の混乱発見に就いて」（『考古学』７－４）1908
52		〃 北区赤羽台	墓跡	壷・小甕	Ⅱ～Ⅳ	宇野信四郎ほか「東京都赤羽出土の中世蔵骨器」（『歴史考古』18）1970
53	葛西城址	〃 葛飾区青戸	城館跡	甕・片口鉢	Ⅳ	『青戸・葛西城址調査報告』（Ⅱ～Ⅳ）葛西城址調査会、1975～76
54	竹橋遺跡	〃千代田区北の丸公園		甕・壷	Ⅴ～17C	実見（展示会「江戸を掘る」）
55	堂ケ谷戸遺跡	〃 世田谷区岡本	墓跡	壷	Ⅲ	『世田谷区史料８』世田谷区史編纂室、1975
56	野毛大塚古墳	〃 〃 上野毛	〃	◎壷・◎片口鉢	Ⅱ	実見（武蔵野郷土館）
57	常尻跡	神奈川県川崎市高津区有馬	〃	小甕	（Ⅳ）	久保常晴「川崎市有馬発見の中世墳墓」（『立正考古』20）1962
58		〃 〃 〃 〃	〃	小甕	Ⅳ	前掲書９
59	井田経塚	〃 〃中原区井田	経塚	壷	Ⅱ	佐々木達夫「野毛大塚の蔵骨器」（『世田谷区史料』８）1975、ほか
60	熊野神社境内遺跡	〃 〃幸区北加瀬	〃	壷・片口鉢	Ⅱ	前掲書９
61	歳勝土遺跡	〃横浜市港北区大棚町	墓跡	三筋壷・壷	Ⅱ～Ⅲ	『歳勝土遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会、1975
62		〃 〃 緑区田奈町		壷	Ⅲ	前掲書９
63	龍泉寺裏山経塚	〃 〃 鶴見区岸ケ谷	経塚・墓跡	三筋壷・壷	Ⅱ～Ⅲ	赤星直忠「横浜市龍泉寺裏山経塚」（『考古学雑誌』23－９）1933
64		（相模）〃 〃 戸塚区戸塚	墓跡	壷		赤星直忠「石造墳墓と矢倉」（『日本の考古学Ⅶ』河出書房）1967
65		〃 高座郡綾瀬町				前掲書９
66		〃 海老名市上郷	墓跡	（片）		『神奈川県埋蔵文化財調査報告19』神奈川県教育委員会、1980
67		〃 〃 大谷	〃	小甕	Ⅳ	『東京国立博物館図版目録』（日本陶磁篇）東京国立博物館、1966
68		〃 〃 〃	〃	壷・片口	Ⅲ	赤星直忠「海老名市大谷中世火葬墓」（前掲書 66）
69	白山神社跡	〃 厚木市飯山	経塚	三筋壷	Ⅱ	『中世の陶器』神奈川県立博物館、1972
70	大山山頂遺跡	〃 伊勢原市大山	〃	壷	Ⅱ	八幡義信「神奈川県の山と信仰」（『神奈川県立博物館たより』16－３）1973

No.	遺跡名	所在地	性格	器種（◎は図示したもの）	年代	引用文献等
71	御伊勢森遺跡	神奈川県伊勢原市上粕屋		甕・片口鉢	Ⅲ	『御伊勢森遺跡（伝上杉定正館址）の調査』御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会、1979
72		〃 平塚市四之宮		壷	Ⅱ	『四之宮上郷・下郷調査概報』湘南砂丘遺跡研究会、1981
73	上ノ台遺跡	〃 〃 北豊田		（片）		『久保田遺跡他遺跡詳細分布調査報告』平塚市博物館、1979
74	阿弥陀畑遺跡	〃 〃 根坂		甕	Ⅲ	実見（小島弘義氏教示）
75	山北古墓	〃 足柄上郡山北町	墓跡	壷・小甕ほか多数	Ⅱ～Ⅳ	前掲書 69 ほか
76	感応寺跡	〃 小田原市南町		甕	Ⅴ	『感応寺址』 小田原市教育委員会、1982
77		〃 鎌倉市十二所	墓跡	大甕		前掲書 64
78	鑪ケ谷北遺跡	〃 〃 〃		甕・片口鉢	Ⅲ	『鑪ケ谷北遺跡』鑪ケ谷北遺跡発掘調査団、1983
79		〃 〃 二階堂	墓跡	◎三筋壷・小甕	Ⅲ～Ⅳ	実見（常滑市立陶芸研究所）
80	覚園寺境内遺跡	〃 〃 〃		大甕・片口鉢	Ⅳ	『覚園寺境内発掘調査報告書』覚園寺、1982
81	報恩寺跡	〃 〃 西御門	墓跡	小甕	Ⅳ	実見（八幡義生氏教示）
82	鶴岡八幡宮境内遺跡	〃 〃 雪ノ下		甕・片口鉢ほか	Ⅱ～Ⅴ	『鶴ケ岡八幡宮境内発掘調査報告書』鶴ケ岡八幡宮、1983、ほか
83	裏八幡西谷遺跡	〃 〃 〃		甕・片口	Ⅲ～Ⅴ	『裏八幡西谷遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター、1984
84	多宝律寺遺跡	〃 〃 扇ケ谷		壷・大甕	Ⅲ～Ⅳ	『多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会、1977
85	海蔵寺裏山遺跡	〃 〃 〃	墓跡	壷・小甕ほか	Ⅲ～Ⅳ	手塚直樹ほか「海蔵寺裏山出土の蔵骨群と土器」（『鎌倉考古』13）1982
86		〃 〃 〃（教育会館建設地）		片口小壷	Ⅳ	実見（鎌倉市教育委員会）
87		〃 〃 小町（カトレアビル用地）		甕・片口鉢	Ⅲ	『鎌倉考古学研究所調査研究報告第1集』鎌倉考古学研究所、1982
88		〃 〃 〃（杉秀ビル用地）		甕・片口鉢	Ⅲ	〃
89	蔵屋敷遺跡	〃 〃 〃		甕・片口鉢・壷	Ⅱ～Ⅳ	『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会、1984
90		〃 〃 御成町（小林邸）		壷・甕・片口鉢	Ⅲ～Ⅳ	『鎌倉考古学研究所調査研究報告第2集』鎌倉考古学研究所、1982
91		〃 〃 〃（ヤノヤビル用地）		三筋壷・甕ほか	Ⅲ	〃
92	蔵屋敷東遺跡	〃 〃 〃		甕	Ⅲ	『蔵屋敷東遺跡』江ノ電鎌倉ビル発掘調査団、1983
93	千葉地遺跡	〃 〃 〃		壷・甕・片口鉢	Ⅲ～Ⅴ	『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団、1982
94		〃 〃 大町		甕	Ⅲ	前掲書 69
95		〃 〃 〃		甕	Ⅳ	実見（八幡義生氏教示）
96	名越坂南矢倉	〃 〃 〃	墓跡	◎ 壷	Ⅲ	実見（鎌倉市教育委員会）
97		〃 〃 〃		大甕	Ⅴ	八幡義生「足利直冬開基の鎌倉花の谷慈恩寺と開山桂堂上人ゆかりの大壷の研究」（『国宝史蹟』39）1965
98	材木座海岸散布地	〃 〃 材木座		甕片多数	Ⅲ	前掲書 20
99	長勝寺遺跡	〃 〃 〃		壷・甕ほか	Ⅲ～Ⅳ	『長勝寺遺跡』長勝寺、1978
100	光明寺裏遺跡	〃 〃 〃		甕・片口鉢	Ⅱ～Ⅳ	『光明寺裏遺跡』北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団、1980

No	遺跡名	所在地	性格	器種（◎は図示したもの）	年代	引用文献等
101	光明寺裏遺跡	神奈川県鎌倉市由比ケ浜（旧第一尋常小学校）		甕・片口鉢		入田堅三「鎌倉小学校庭発掘の古銭調査報告」（『考古学雑誌』25－9）1935
102	銭洗弁天裏山矢倉	〃 〃 佐助	墓跡	壷・小甕		『鎌倉の出土遺物』鎌倉国宝館、1970、ほか
103		〃 〃 長谷		壷	Ⅲ	前掲書9、67
104		〃 〃 〃（長楽寺山尾根道）		小壷		前掲書64
105	極楽寺旧境内遺跡	〃 〃 極楽寺		壷・甕・片口鉢	Ⅲ～Ⅴ	『極楽寺旧境内遺跡』鎌倉市教育委員会ほか、1980
106		〃 〃 〃		壷	Ⅲ	前掲書9、67
107	成就院前矢倉	〃 〃 〃	墓跡	◎小甕	Ⅳ	実見（鎌倉市教育委員会）
108	円覚寺境内西やぐら群	〃 〃 山ノ内		（片）		『円覚寺境内西やぐら群発掘調査報告書』円覚寺境内西やぐら群発掘調査団、1983
109	西管領屋敷南やぐら群	〃 〃 〃		甕	Ⅴ	『西管領屋敷南やぐら群発掘調査報告書』西管領屋敷南やぐら群発掘調査団、1984
110		〃 〃 〃	墓跡	小甕	Ⅳ	八幡義生「鎌倉市葛原ケ岡出土常滑広口壷について」（『国宝史蹟』43）1968
111	浄智寺境内遺跡	〃 〃 〃		大甕（蓄銭）	Ⅳ	『掘り出された鎌倉』鎌倉考古学研究所ほか、1981
112	鎌田古墓	（下総）千葉県野田市	墓跡	◎壷・◎片口鉢ほか	Ⅲ	山田友治「房総における中世のやきものについて」（『史館』5）1975
113		〃 千葉市園生	〃	壷		山田友治「房総における中世のやきものについて(2)」（『史館』6）1976
114	亥鼻城跡	〃 〃 亥鼻	〃	壷	Ⅲ	前掲書112
115	西屋敷遺跡	〃 〃 大宮町		甕・片口鉢	Ⅲ～Ⅳ	『西屋敷遺跡』千葉県埋蔵文化財センターほか、1979
116	城ノ腰遺跡	〃 〃 〃		片口鉢	Ⅲ	〃
117	東光寺裏山遺跡	〃 〃 平山町		壷	Ⅱ	山田友治「房総における中世のやきものについて(3)」（『史館』9）1977
118	師戸城跡	〃 印旛郡印旛村	城館跡	壷	16～17C	前掲書113
119	江原台遺跡	〃 佐倉市江原台		甕	Ⅲ	『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』千葉県教育委員会ほか、1980
120		〃 印旛郡富里村		壷	16～17C	前掲書113
121		〃 香取郡下総町		壷	16～17C	〃
122	大慈恩寺遺跡	〃 〃 大栄町	墓跡	壷	Ⅲ	前掲書117
123		〃 〃 小見川町	〃	三筋壷	Ⅱ	〃
124		〃 〃 干潟町		壷	Ⅱ	前掲書9
125	熊野神社境内経塚	〃 八日市場市宮本	経塚	◎三筋壷	Ⅱ	山田友治ほか「県指定常滑三筋壷について」（『史館』3）1974
126	金光寺廃寺	（上総）〃 山武郡芝山町	墓跡	壷・大甕ほか多数	Ⅲ～Ⅴ	前掲書113
127	上総国分寺台遺跡	〃 市原市		大甕	Ⅳ	〃
128	西谷124号墳	〃 〃 西谷	墓跡	大甕・片口鉢	Ⅴ	『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会ほか、1982
129		〃 〃 下矢田		甕	Ⅳ	前掲書113
130	一宮城跡城之内遺跡	〃 長生郡一宮町		甕	Ⅴ	『一宮城跡城之内遺跡発掘調査報告書』山武考古学研究所、1984
131		〃 木更津市相里	墓跡	小甕	Ⅳ	前掲書112
132	旭森経塚	（安房）〃 安房郡天津小湊町	経塚	壷	（Ⅴ）	〃
133		〃 館山市館山		甕	Ⅲ	前掲書67